

# 「小中学校のいきっこ留学制度」

～子どもが主体的に学ぶ授業を通して生きる力を育む～

## はじめに

長崎県壱岐市は、九州本土と朝鮮半島の間に位置する壱岐島を中心とした離島である。福岡市博多港から北西に約76km、佐賀県唐津東港から北に41kmの距離にあり、島全体がなだらかな丘陵地をなしているので、玄界灘に浮かぶ夢の浮島と呼ばれている。

平成の大合併までは、郷ノ浦町、勝本町、芦辺町、石田町の4町体制が長く続いていた。平成16年3月1日に4町が合併し壱岐市となった。壱岐市の当初の人口は約31,400人であったが、令和4年では約25,200人となり、少子高齢化が進んでいる。

小学校は、合併当初の18校を今も存続させている。複式学級を有する学校が半数になっているが、一人ひとりの子どもを大切に地域に根ざしたきめ細かな小学校教育に取り組んでいる。中学校は、合併当時は10校あったが、規模適正化の視点で平成23年度に統廃合し、旧4町に1校ずつの4校にした。高等学校は県立高校が2校あり、1校は普通科、もう1校は商業科と情報処理科を有している。地元の子どもの進学先として地域の期待に応えている。



## 1. 壱岐島の歴史・文化と「留学制度」

壱岐市内には弥生時代の環濠集落として国特別史跡としての「原の辻遺跡」がある。『魏志』倭人伝に記された「一支国（いきこく）」の王都に特定された場所で多くの遺物が発掘されている。弥生時代の集落遺跡として、静岡県「登呂遺跡」、佐賀県「吉野ヶ里遺跡」に次いで3番目に国の特別史跡に指定された。

また、平成27年度から新たに創設された「日本遺産」第一号として、「国境の島 壱岐・対馬・五島 ～古代からの架け橋～」に認定されている。

壱岐市には、国境を越えた東アジア諸国との交流の歴史や文化を学ぶ要素があることを活かして、平成15年度に長崎県教育委員会は、高校生の「離島留学制度」を創設し、壱岐高等学校に「原の辻歴史文化コース」が開設された。社会の変化に対応して現在は「東アジア歴史・中国語コース」と名称を変更して全国各地から留学生を受け入れている。

壱岐市は平成27年10月に制定した「壱岐市まち・ひと・



しごと創生総合戦略」の中で、「教育のしま」プロジェクトとして、離島留学制度を小中学生に広めることを提起した。吉野市独自の小中学生の離島留学制度の検討に着手し、平成30年の9月から小中学生の「いきっこ留学」をスタートさせた。



## 2. 「いきっこ留学」制度の特色

### (1) 留学タイプを3つ用意した。

- ① 「里親留学」…留学生が里親の下から市内の小・中学校へ通学
- ② 「孫戻し留学」…留学生が祖父母等の下から市内の小・中学校へ通学
- ③ 「親子留学」…新規転入の親子で、留学生が市内の小・中学校へ通学

### (2) それぞれのタイプに応じて留学に係る経費の一部を吉野市が補助する。

- ① 「里親留学」…補助金は一人につき月4万円。実親の負担金は一人につき月4万円。
- ② 「孫戻し留学」、「親子留学」…補助金は一人目月3万円、二人目以降はそれぞれ月1万円。  
※ 吉野市の補助金及び実親の負担金は、留学の実績日数によって調整する。

### (3) 吉野市内の小学校18校、中学校4校の全ての学校が留学生を受け入れる体制が整っている。

- ① 児童生徒数や教育環境等、留学を希望される方のニーズに応えることができる。
- ② 次に (4) で示す「事前見学」に来ていただき、児

童生徒の学校生活、特に授業の様子を直接見学してもらう。普段のありのままを見ることで実親や子どもは安心感をもつことに繋がる。

- ③ 留学生を受け入れることで、吉野市に居ながら、全国各地の子どもと交流し、体験が豊かになる。

### (4) 留学を希望されている方は、学校や里親宅の「事前見学」を必須としている。

- ① 問い合わせには丁寧に対応し、気持ちや事情等を聴かせてもらう。
- ② 学校及び里親宅を事前に見学し、自分たちの目で確認し、改めて親子で協議して、学校や里親宅を選択させている。
- ③ 事前見学の行程の最後に、市教委で教育長面談を実施し、総合的な視点で意見交換をする。
- ④ 事前見学をすることで、留学の意思や決断を後押しすることができる。

### (5) 募集期間を設定しているが、期間外の問い合わせにも、担当者は丁寧に対応する。

- ① 「いきっこ留学」制度を知るタイミング、子どもの事情等、いろいろな状況を抱えて子育てをしている家庭のお力になれるよう努めている。
- ② 事情を聴かせていただき、内容を事務局で協議し、「事前見学」等の話に進むこともある。
- ③ 不登校に陥っている場合も、吉野市の学校の教育環境で立ち直ることができるかもしれないと思われる事例の場合、その機会を提供する意味で「一度留学させては」と勧める。実際に留学して改善が見られない場合は「いつでも辞退して構わない」と話している。

### (6) 留学希望者が急増しているため各タイプの定員を設定することにした。

- ① 「里親留学」…20名
- ② 「孫戻し留学」、「親子留学」…各10名  
※ 留学の継続は3年まで可能。毎年度、継続するか終了するか意思を尋ねる。  
※ 「里親留学」は、1年間の予定の方と継続する方が半々の状況である。  
※ 「孫戻し留学」と「親子留学」は継続を希望される方が多い。

### 3. 「いきっこ留学」のこれまでの状況

#### (1) 「いきっこ留学生」の実績数

いきっこ留学生実績数

留年タイプ \ 年度	H 30	H 31	R2	R3	R4 (R4.5.1 現在)
里親留学	1	13	15	17	20
孫戻し留学	4	4	6	7	9
親子留学	0	3	9	15	13
合計	5	20	30	39	41

※ H31 年度以降は全て継続を含む。

いきっこ留学問い合わせ実績数

留年タイプ \ 年度	H 30	H 31	R2	R3	R4 (R4.8.31 現在)
里親留学	17	30	53	61	28
孫戻し留学	2	3	3	2	1
親子留学	3	10	20	29	138
合計	22	43	76	92	167

#### (2) 「いきっこ留学コーディネーター」の任用

- ① 「地域おこし協力隊」の中に「いきっこ留学コーディネーター」と限定して全国に募集をかけ、応募者を面接して3年間の勤務として1名選考した。令和2年2月から51歳の女性を任用
- ② 市教委の職員1名と力を合わせて「いきっこ留学」に係る全ての業務に従事する。
- ③ 国の補助事業であり3年で打ち切られるので、その後を吉崎市として検討している。

#### (3) 「いきっこ留学コーディネーター」の業務内容

- ① 「問い合わせの対応」(電話、メール)。「事前見学の調整」。対応内容の文書整理。
- ② 「事前見学来島時の対応」(迎え、案内、見送り、資料を基に制度の説明、関係書類渡し等)
- ③ 「留学生活のサポート」(定期的に里親宅を訪問し、留学生の相談相手になる。里親との情報共有、学校との情報共有。必要に応じて実親とも情報共有と連絡等)
- ④ 里親留学の児童生徒が実親の下に帰省した時は、吉崎市に帰って来た時にコロナ簡易検査を実施する。

⑤ 「孫戻し留学」と「親子留学」の場合は祖父母等や実親の下で元気に生活していることが多いので、定期的に電話で様子を尋ねる。状況によっては家庭訪問を実施している。

⑥ その他留学生に係る諸課題への対応。(里親の開拓、「いきっこ留学」の宣伝等)

#### (4) 「里親」の状況

- ① 里親留学開始時に一人の方に「里親」をお願いできた。その後5名の方が手を挙げていただき、現在6人で対応している。
- ② 一人の里親さんで1名から6名までの留学生を預かっていたらいい。
- ③ 家の広さや部屋数等、里親として対応できる環境はもってあるが、「人様のお子さんを預かり、もしものことがあったら」と考えて躊躇される方が多い。
- ④ 「里親留学」を希望した問い合わせが多い中で、里親が増えないことが大きな課題である。
- ⑤ 毎日の食事の世話をするのは主に女性になるので、女性の賛同が得られないと手を挙げることはできない。増えない要因とみている。
- ⑥ 宿泊棟を確保し、センターとして運営することも検討している。



## 4. 「留学をしたい、させよう」の内容

### (1) 「問い合わせ」や「事前見学」で聴く動機

- ① 自然体験をさせたい。子どもは自然が好き。虫や植物の観察に興味がある。
- ② 自然環境の中で、のびのびとした学校生活をさせたい。
- ③ いつかそのような体験をさせたいと考えていた。するなら今と違って。
- ④ 不登校になっているので環境を変えて取り戻したい。子どももその気になっている。

### (2) 「里親留学」に見られる子どもの考えと実親の想い

- ① 親下を離れて生活することを十分理解しているか。
- ② 里親宅の生活、留学生同士での共同生活に協調性をもって臨むことができるか、我慢できるか。
- ③ 数日間旅行をするとか林間学校に行くこととの違いを理解しているか。
- ④ 生活習慣の違いや文化の違いを受け入れる強い気持ちを持っているか。
- ⑤ 今の家庭のいろいろな事情を考え、意を決している様子も窺える。

## 5. 「いっこ留学」のねらいは学校生活の充実

### (1) 壱岐市の学校教育の中心は「授業」

- ① 学校に通い、授業を受けると、自ら学んでいることが実感できる。
- ② 壱岐市の小中学校は、子どもたちが主体的に学ぶ「課題解決学習」に取り組んでいる。
- ③ 全ての小中学校は、「体験的な活動を取り入れた問題解決的な学習過程」をモデルとしている。
- ④ 学校と市教委が力を合わせ、子どもたちに「確かな学力」を身に付けさせている。
- ⑤ どの学校も授業研究に力を入れているので、教職員の授業力は高まっている。
- ⑥ 市教委と学校は拠り所を共有しているので研究成果が出る。共通の拠り所は市教委が作成した『第五版』と呼ばれる冊子（A4判で66頁）で全ての教職員に

市独自の必携として常備させている。

- ⑦ 子どもたちは学び方を身に付けるので授業が楽しくなり、主体的に学ぶようになる。
- ⑧ 他地域から転入した教職員も身に付けていく。留学生も学び方の身に付け方は速い。
- ⑨ 市教委は毎年全22校の学校訪問指導を実施し、全ての教職員に授業をしてもらい、一人の教職員に一人の教科等指導員が張り付いて授業を見て、一対一で授業をふりかえる分科会指導を続けている。

### (2) 市教委は授業を大切にしている教職員を本気で育てている。

- ① 授業を大切にしている教職員は子どもを大切にしている。
- ② 壱岐市の学校で授業を受けると子どもたちは一人ひとりが大切にされていることを実感してくる。
- ③ 学校は行きたくなる、授業は楽しくなる、留学生をそういう気持ちにさせる。

### (3) 壱岐市に留学して学校に通えば留学生生活は継続できる。

- ① 里親宅での生活習慣の違いを受け入れる力があれば自分を取り戻すことができる。
- ② 留学生生活を満了して帰られる留学生や実親からは学校に対する不満の声は聴かれない。
- ③ いろいろな事情を抱えている子どもや悩んでいる実親の方にも「ダメ元でもいいのですよ、思い切って留学させてみてはいかがですか」と言えるのも、学校教育が充実しているからである。



## 6. 「いきっこ留学」の課題

### (1) 希望の多い「里親留学」に対応できるように「里親」を確保すること。

- ① 特別な育て方を求めるものではなく、それぞれの家庭で取り組まれた子育ての延長で良いことを伝えている。
- ② 「里親」は、こうしなければならない等の横並びは求めている。留学生には、その家の文化や生活習慣を受け入れることを訴えている。
- ③ これまで別の生活をしてきた人間同士が共同生活を始める訳であり、いろいろな問題が起こるのは当たり前の広い感覚で「里親」に挑戦してもらう。

### (2) 留学生が増えても一人ひとりへの対応が行き届くように体制を整えること。

- ① 「孫戻し留学」と「親子留学」の子どもたちの問題は少ないので、市教委としては、「里親留学」の子どもたちへの細やかな対応ができる人材を確保しなければならない。
- ② 小学校の女儿や中学校の女子生徒の「里親留学生」にとっては、女性の「いきっこ留学コーディネーター」の存在は欠かせない。日々の生活や心の支援を果たす役割は大きい。地域おこし協力隊としての3年間の期限が迫る中、後をどうするかは大きな課題である。

### (3) 留学生の定員を設定しているが、増加する問い合わせにどこまで対応するかを検討すること。

自給自足のできる島、人情味溢れる人間性、自然の豊かさだけでも住みたくなる島である。これに「子どもたちの学校教育が充実している」が加わると鬼に金棒の島になる。私たち壱岐市教育委員会は子どもたちに「生きる力」を身に付けさせるための授業改善に力を注いでいる。「いきっこ留学生」にも必ず「生きる力」を身に付けさせる。

## おわりに

5年目を迎えた「いきっこ留学」制度、体験した方々の生の声が一番効果的な宣伝になっている。口コミによる評判が広がり、年毎に数多くの問い合わせが全国各地から寄せられるようになった。アメリカやカナダからの留学も大きな財産となった。また、「いきっこ留学」が基になって壱岐市に永住される方も出るなど地域の活性化に繋がっている。